

■発行  
国立大学法人群馬大学  
ダイバーシティ推進センター

〒371-8510  
群馬県前橋市荒牧町4-2  
TEL: 027-220-7146  
FAX: 027-220-7143  
mail:kyodo-sankaku@ml.gunma-u.ac.jp  
HP:https://diversity.gunma-u.ac.jp/

2024.11

vol.36



## 大学幹部の皆様との ランチミーティング 開催

令和6年9月19日、荒牧キャンパスにて開催されたランチミーティングでは、一般参加者13名で少数でしたが、立食形式のランチを囲み、有意義な時間を過ごすことができました。幹部の先生方からは、大学の上位職に女性を増やそうと、ご所属ごとに取り組みを紹介され、皆で同じ方向に進んでいく必要性について、お一人ずつ、ご挨拶いただきました。同じ学内ではありながら、研究者間の情報交換の場が少ないことが話題になりました。気軽にお互いの研究内容や最近の取り組み、学生指導についてなど、交流できる機会があると良いのでは、という意見が上がる一方、ランチミーティングの継続について再考する時期では、という声も聞かれました。

意識啓発では、ダイバーシティ推進委員や関係者の皆様からの声を取り入れながら今年度も事業を進めていきたいと思っております。



## 大学幹部向けFDセミナー 開催

令和6年10月17日、荒牧キャンパスにて大学幹部向けFDセミナーを開催しました。今年度は、新潟大学経営戦略本部ダイバーシティ推進センターの関奈緒センター長と中野享香准教授を講師にお招きしました。新潟大学は、2006年度から開始した文部科学省の「女性研究者支援モデル育成」事業に2008年度に採択され、両立支援や次世代育成をはじめとする各種取組を創設し、現在は2回目の「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」に採択され、多くの取組を実施しています。



FDセミナーでは、ダイバーシティの概念をはじめ、理工系女性研究者のすそ野拡大、女性リーダー（教授・准教授）を育成する「女性研究者開花プラン」支援事業、「若手教員スイングバイ・プログラム」、「ジェンダーダイバーシティ部局応援プロジェクト」などの取組や成果などをご紹介いただきました。

今回、「医学部(附属病院)で取り組み始めた働き方改革」をテーマに 群大病院の現状を昭和地区事務部総務課労務管理係 平野 忠臣さん、相馬 暢晃さんにお伺いしました。

日本でも近年、働き方改革が始まりました。少子高齢化に伴う「労働力人口の減少」や「グローバル化」、「ICT・AIの発展」などを背景に、労働環境の質と生産性の向上を目指し、長時間労働の是正、柔軟な働き方の推進、女性や高齢者など多様な人材の活用を促す国や企業の取り組みが再考され、ワークライフバランスも叫ばれるようになりました。それは医師においても例外ではありません。今までの日本の医療は、医師の自己犠牲や長時間労働に支えられてきた現状があります。勤務医の4割が過労死ラインである月80時間の残業をしていると言われ、その状態を前提に医療サービスが確保されていました。医師には「診察治療の求めがあった場合には、正当な事由がなければ、これを拒んではならない」とする医師法の規定（応召義務）がある等、医師という職業は特別視され、医師であっても労働者であるという観点が薄かったように思われます。

しかし、このような状態が続くと医療ミスリスクもあり、日々アップデートされている医療技術への適応も難しくなります。日本は少子高齢化により医療現場の需要が大きくなり、医療従事者の確保が難しくなっています。そのような現状を踏まえ、今後もより質の高い安全が確保された医療が求められ、持続可能な医療体制の維持が主要命題となっており、医師の働き方改革は日本の医療の未来を守るための取組と言えます。そこで2024年4月から、医師の残業時間に上限を設ける「医師の働き方改革」の新制度（厚生労働省）がスタートしました。

この制度はすべての医師に対し原則、年960時間以下の時間外労働規制が適用となりました(A水準)。しかし群大病院の場合、いきなり年960時間以下の時間外労働規制をすると、地域医療や救急医療に携わる医師が対応しきれず地域医療や救急医療が崩壊してしまうことも考えられます。本制度では、経過措置として年間1860時間以下にまで上限が緩和できる連携B水準が設置されているため、群大病院の医師はこの水準が適用されています。連携B水準は2035年に廃止されることが決まっており、医療需要と医師数が均衡すると推計される2035年度末までの経過措置となっています。群大病院も、2035年までに時間外労働を960時間以下のA水準へ移行することが求められています。



# 医師の働き方改革の概要やメリット

## Q. どうして働き方改革なの？

A. 日本の医療は、医師の自己犠牲や長時間労働により支えられてきた現状があります。こうした現状を「改革」し、医師が健康に働き、健康な生活を送れるように取り組みがスタートしました。

## Q. ざっくり、どんな内容の制度なの？

A. 医師の残業時間に上限を設ける制度です。原則、医師の年間の時間外勤務は960時間以内となります。

## Q. 医師と患者にどんなメリットがあるの？

A. 長時間労働前提の環境では医療の勉強時間が確保できず、医療ミスリスクも高くなります。また、改革により医師はワークライフバランスも充実させやすくなり、患者は今後も安全で質の高い医療を受けられるようになります。

## Q. 医療のレベルが落ちちゃう心配はないの？

A. 看護師やその他医療技術職員等へのタスクシフト/シェアにより医師の負担を減らすことで、患者の治療やケアに集中することが可能となり、よりレベルの高い医療を提供できるようになります。

## Q. 地域医療が崩壊しちゃうってニュースでやっていただけ？

A. 一律に960時間以内の時間外勤務を制限する働き方を適用すると、地域医療の崩壊が危惧されます。診療体制の整備には時間がかかることが予想され、時間外労働の上限も960時間以上の枠(1860時間以内)が別途設けられました。

## Q. 群大病院ではどのような取組を行っているの？

A. 「病状説明などの勤務時間内実施」(図1参照)、「会議の効率化合理化に向けて」のポスター(図2参照)で働き方改革を啓発しています。また、群大病院の医師は宿日直、夜勤、兼業等複雑な勤務体制で働いています。そういった勤務を管理するためのシステムとして、Dr. JOYという勤怠管理システムで、医師にはビーコンタグという発信機を携帯してもらい、院内に200か所以上設置した受信機で位置情報を得て、正確な勤務時間の把握に努めています。

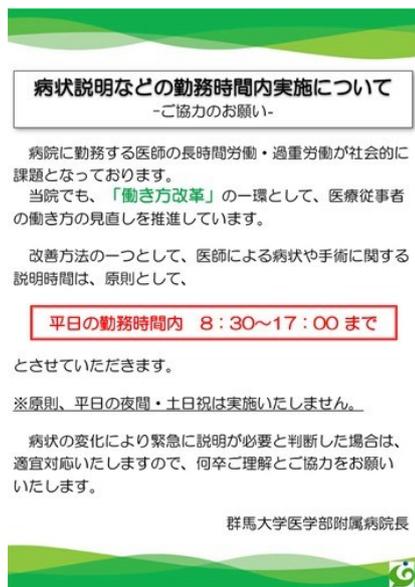


図1 病状説明などの勤務時間内実施



図2 「会議の効率化合理化に向けて」のポスター



## 包括的性教育講座 開催

令和6年8月10日、国際協力NGOであるジョイセフ(JOICFP)の協力のもと、ダイバーシティ推進センター主催の性教育講座が開催されました。現在の日本の初等・中等教育は、2000年代の「性教育・ジェンダーフリーバッシング」の影響もあり、科学的な知見に基づいた、自他の身体を尊重するための人権教育としての性教育を奪われている状況が続いており、そうした性教育を大学で提供することへのニーズが高くなっています。今回はジョイセフの「I LADY. 出前講座」を招聘し、当日は3名のスタッフの派遣を受けました。本学からは学生15名+教職員4名ほどが参加しました。



内容としては、映像教材を使って性的同意の重要性を確認したり、カードを使って(デート)DVについてグループで話し合ったりするなど、参加者間でのコミュニケーションも重視した講座となりました。

今後も扱う題材を変えるなどしつつ、継続的に性教育の講座を開催したいと考えています。



## 医学生・研修医等をサポートする会 開催

令和6年9月26日、群馬県医師会主催で「令和6年度医学生・研修医等をサポートするための会」が開催されました。本会は、医学科4年生の臨床実習前講義として、男女共同参画やワークライフバランスについて考える機会となっており、当日、106名の医学生が参加しました。医師会の活動について、医師会理事の今泉友一先生にご紹介いただいた後、2つの講演を聴講しました。講演1では、前橋赤十字病院 院長補佐兼心臓血管内科部長の庭前野菊先生から「大切なものは目に見えない～医師としての成長と可能性～」を、講演2では、群馬大学大学院医学系研究科小児科学講座教授の滝沢琢己先生から「一步踏み出し外の世界へ」をご講演いただきました。



庭前先生には、ご自身の心臓血管内科としてのキャリア形成、医師としての歩みとターニングポイント、恩師との出会いからの学びについて、「人生に無駄な経験はない」こと、カテーテル治療の歴史から最前線での診療を通じて、「凄く楽しいと思うことを仕事にしよう」と力強いメッセージをいただきました。



滝沢先生には、学生時代から大学院時代の活動や恩師との出会い、留学へ踏み出した経緯、帰国後のさらなる研究者としての歩みを通じて、「自分で自分を育てよう」、「失敗恐れずに外へ出てみよう」、「自己実現が他人のためになる希有な仕事」と指導者として医学生を鼓舞するアドバイスをいただきました。

閉会后、多くの学生から先生方のキャリアに対して、今後の臨床実習や研修医の間に自分の楽しいと思える分野を探したい、学生のうちに築いた関係を大切にすることや、興味のあることを仕事にすることで大変なことも乗り切るということを参考にしたい、研究を軸に臨床と両立させる生き方、直接救命に関わる技術の普及活動など、多彩な経験を知ることが良い刺激となった、など、多くのコメントが寄せられ、盛況のうちに終了しました。